オホーツク脳卒中研究会　ニュースレター第 6 号

第6号　2009/5/20 発行

発行者：オホーツク脳卒中研究会
代表幹事：鈴木　望　北見赤十字病院　脳神経外科

第4回目となるオホーツク脳卒中研究会学術講演会を3月27日、ホテルベルクラッシック北見で開催しました。

当日は古屋聖兒北見医師会長をはじめ、医療・介護関係者120名の方にお集まりいただきました。

今回の学術講演会は中村記念病院脳神経外科　中川原　譲二先生をお招きし、札幌で先進的に脳卒中地域連携パスを運用している「札幌市脳卒中地域連携の現状と課題」についてご講演頂き、札幌市の脳卒中地域連携パスの取り組みを知り、北網圏における医療と介護ネットワーク推進を生かすことができました。

学術講演会に参加した北星脳神経外科病院PTの箭内さんへ参加手記をお願い致しましたのでご紹介いたします。

古屋北見医師会長様より
ご挨拶をいただきました

目次：

第 4 回学術講演会 報告（特別講演）	1
第 4 回学術講演会 報告（活動報告）	2
第 7 回幹事会報告	2
平成 20 年度第 3 回オホーツク脳卒中地域連携パス合同委員会　報告	3
平成 21 年度　代表幹事あいさつ	4
平成 20 年度　代表幹事	4
新幹事紹介	4

札幌市における脳卒中地域連携の現状と課題

第 4 回学術講演会報告

講師　医療法人医仁会　中村記念病院 脳神経外科　診療本部長
札幌市脳卒中地域連携パスネット協議会 副代表 中川原 譲二先生
座長　北星脳神経外科病院　院長　松岡　高博先生

今回、第4回オホーツク脳卒中研究会学術講演会に参加し、中村記念病院の中川原譲二先生による「札幌市における脳卒中地域連携の現状と課題」のお話を聞くことが出来ました。

中川原譲二先生

札幌市における脳卒中地域連携の話では、診療ネットワーク形成について脳卒中地域連携パスの導入が不可欠であり、救急医療としての脳卒中への対応と、急性期医療、回復期医療、維持期（在宅）医療を円滑に継ぐ地域包括医療としての脳卒中への対応とが、非常に重要とのお話がありました。

その他、発症3時間以内の脳梗塞に対するアルテプラーゼ（t-PA）静注療法の国内使用が可能になり、またSCU（脳卒中ケアユニット）等での集中した急性期リハビリテーションにより、入院期間の短縮や早期社会復帰が実現可能なことなども再認識することが出来ました。

座長を務めた　松岡　高博先生

講演会の様子

限られた資源の中で質の高いサービスを提供するためには、脳卒中地域連携パスによる病院連携が鍵になるのではないかと思います。そして早期脳卒中を発見する指標としてAct-FASTである、FACE：顔、ARMS：手、SPEECH：言　語、TIME：時間を地域住民の方へ啓発していく重要性を感じました。

私たちの住む北網地域でも更なる脳卒中診療の病院連携や医療と介護ネットワーク作りなどといった取り組みが活性化していけるよう、私たちリハビリテーションスタッフも努力していかなければいけないと感じました。そして、地域で生活している住民の方に安心してかかれる地域医療を継続して提供していけるような街づくりに貢献出来るよう、日々頑張っていきたいと思います。

北星脳神経外科病院　箭内　一浩

北星脳神経外科病院
診療部リハビリテーション科
理学療法士　箭内　一浩

道東脳神経外科病院
MSW　関　　建久

〔活動報告　関〕

オホーツク脳卒中地域連携パスと医療と介護のネットワーク

中川原先生の講演に先立ち、北見･網走地区で実施しているオホーツク脳卒中地域連携パスの実績の紹介と全国で課題となっている脳卒中地域連携パスの維持期（慢性期･在宅･介護施設など）の連携の取り組みの活動報告を行った。パスの実績は今号の委員会報告に譲り、維持期の活動を中心に述べる。

昨年「医療と介護ネットワーク作り」をきっかけに各地でタウンミーティングを実施し、各地域でそれぞれの課題解決へ取り組んでいる。北見地区では「北見地域タウンミーティング運営委員会（代表：武田学氏 北見市東部･端野地区地域包括支援センター）」が継続した活動を実施しており、この委員会の活動を紹介した。

当該委員会が3月21日に開催した「病院から在宅の流れを考えるリレー式PR大会」では、委員の所属する施設の自慢や課題を本音で紹介し、急性期から在宅の順に9つの事業所が発表した。（下記参照）

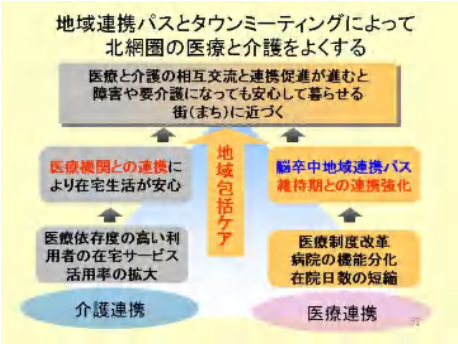
開催に先立ち、北見市役所の長尾氏より、北見市の要介護者の状況が報告された。北見市は毎年、1,200人の新規の要介護認定が行われている。要介護･要支援認定者総数　4,770人のうち、在宅療養の方が2,665人（55.9%）いた。このうち、胃ろう･経管栄養･インスリン･人工透析など医療的管理を必要とする方は合計で223人（8%）いることが分った。今後もこの数は増加することが予測され、医療的管理を在宅で手当していく仕組み作りの重要性が明らかになった。

★

PR大会に参加した方の意見（下記）からも本音の情報が提供されることによって、互いの得意分野というストライクゾーンが明らかになり、役割分担が進み、相手に対する過度の期待が良い意味で減少していくと思われる。

- ●医療・介護で連携している部分がまだごく一部だと感じる　どこにいてもスムーズな情報の連携ができるよう皆の協力が必要
- ●医学的管理が必要な方の行き先が少ないので取り組む施設を増やしたい
- ●発表された病院がどういう気持ちで仕事をしているかという心意気が伝った
- ●建前と本音が本当は言いにくいことがあるが、思っているだけでなく、声に出して言わないと現状は変わらないと思った
- ●実際に出来ていない点を発表されるところが印象的。このような場で自分のところの失敗例を出せるのは大切だなと改めて思う
- ●医師や看護師、コメディカルスタッフの参加ももう少しあればよいと思う
- ●病院のことは一般人は口を出せないという風潮がある。これを払拭するには今日のようなＰＲ大会を一般住民に向けて行うのがいいと思う
- ● 在宅の流れを進めるためには、在宅でもここまでできるという事例報告が必要

道東脳神経外科病院　関



第７回幹事会の報告

第7回幹事会の様子

第３回情報交換会に先立ち、第７回目の幹事会を開催した。〔平成 21 年 3 月 27 日〕

【報告事項】

●オホーツク脳卒中地域連携パス実績について（山崎）

【審議事項】

●オホーツク脳卒中地域連携パス参加病院の拡大について(関)

→小林病院の連携医療機関参加予定

●幹事の追加について

→オホーツク海病院　伊藤新院長就任に伴い、幹事の追加が承認された

また次年度の代表幹事に鈴木望氏（北見赤十字病院副院長）を選出した。

今年度事業は学術講演会の開催、市民公開講座、維持期（在宅）との連携強化、連携パスの参加病院拡大などを実施することとした。

また脳卒中患者の実態把握を目的に、算定の有無を問わず脳卒中全例のパス適用について検討していくこととなった。〈関〉

平成 20 年度第 3 回
オホーツク脳卒中地域連携パス合同委員会　報告

脳卒中地域連携パス情報交換会

- 2008 年 11 月～ 2009 年 2 月までの 4 ヶ月の脳卒中地域連携パスの発行数は 90 件。
- 脳卒中患者数の合計は 314 名
- 市町村別、年代別の脳卒中患者数の内訳も集計
- データ集計をするなら全数データを収集していくことが提案された。

21名が参加しました

平成21年3月27日（金）第３回オホーツク脳卒中地域連携パス合同委員会をホテルベルクラシックにて開催しました。（参加者21名）

今回の主な議題は2008年11月から2009年2月までの4ヶ月間について、

Ⅰ連携パス発行実績の確認。

Ⅱ参加医療機関及び協力医療機関の脳卒中患者データ（「北網脳卒中患者数集計データ」と名称を決定）の報告を集計し、その結果を共有。

Ⅲ地域連携診療計画（連携パス）の見直しと意見交換を行いました。

Ⅰでは、連携パスの発行数は90件。うち計画管理料算定数23 件、退院時指導料算定数10件でした。（表1参照）

Ⅱでは参加病院の脳卒中患者数の合計は314件となり、市町村別、年代別の脳卒中患者数の内訳も集計しました。前回の合同委員会より継続されているデータ収集により、オホーツク管内の脳卒中患者の動向をより把握できるデータが集まり、地域の脳卒中患者の実態が把握できました。（表2から表6参照）

Ⅲ（連携パスの見直し・意見交換）では、外来の患者さんを診ていても、前の状態がわからない。前回発症の治療終了時の状態を知りたい。所属する医師やスタッフに連携パスの記載を徹底させるのは困難。対象者もあまりいない。スタッフ全員に定着はしていない。パス対象者は少ない。特に現時点では問題はない。などの意見が出されました。

しかし今回、データ収集項目について『データを有効なものにするには、全数を行わなければ意味がない。算定の有無は別として、全数データを収集すべき』との意見は、今後のオホーツク脳卒中地域連携パスの将来の意味づけを示唆する重要な提案でした。

当日は事務局から、収集項目の追加が提案され、急性期病院の退院時FIM、回復期患者の入院時FIM／退院時FIMを追加することが承認されました。

2009（表2）4月より、小林病院も連携パスの医療機関（連携医療機関）として参加が決定しました。次回は2009年7月を予定しています。今年度は1年間の実績を計画管理病院が北海道厚生局へ報告することになっています。参加医療機関の担当者の皆様にはお手数をお掛けしますが、協力宜しくお願いいたします。

道東脳神経外科病院　MSW 山崎　章

表1

オホーツク脳卒中地域連携パスの実績
2008.11～2009.2（4ヶ月間）

連携パス発行数	90 件					
病名ごとの患者数	脳梗塞 76 件	脳出血 16 件	SAH 6 件	←計98件 手術8件を含む		
平均入院日数(急性期)	17 日	16 日	34 日			
転 帰 先	自宅 53 件	回復期 22 件	療養・施設 5 件	その他 10 件		
退院時の患者の状態（ステップ分類）	全介助 6 件	ベッド上 4 件	車いす 12 件	歩行可能 18 件	応用歩行 35 件	未集 15 件
計画管理料算定数	23 件					
退院時指導料算定数	10 件					

表2

市町村別脳卒中患者数の内訳
2008.11～2009.2（4ヶ月間）　N=314

	脳梗塞	脳出血	SAH	合 計
北見市	111	25	7	143
網走市	44	11	3	58
美幌町	25	5	2	32
その他	54	19	8	81
合 計	234	60	20	314

表3

市町村・年代別脳卒中患者数
2008.11～2009.2（4ヶ月間）　N=314

	40才未満	65才未満	65才以上	合 計
北見市	0	32	111	143
網走市	1	16	41	58
美幌町	2	6	23	31
その他	3	16	63	82
合 計	6	70	238	314

表4

市町別・脳梗塞患者の詳細な病名
2008.11～2009.2（4ヶ月間）　N=201
※一部病院のデータを除く

	ラクナ脳梗塞	アテローム血栓性脳梗塞	脳塞栓	合 計
北見市	42	23	18	83
網走市	2	38	4	44
美幌町	4	13	6	23
その他	10	31	10	51
合 計	58	105	38	201

表5

脳卒中患者の入院時JCSと退院時mRS
2008.11～2009.2（4ヶ月間）　N=220

入院時JCS ＼ 退院時mRS	0	I	II	III	IV	V	VI	合計
0	72	42	9	10	9			142
1	8	1	3	2	6	1	1	22
2	4	3	1	1	9	2		20
3	4	2	2	4	3	4	4	23
10					1			1
20	1					1		2
30					1			1
100		2				2	1	5
200							2	2
300							2	2
合計	89	50	15	17	29	10	10	220

表6

脳卒中患者の急性期からの転帰先
2008.11～2009.2（4ヶ月間）　N=290

	脳梗塞	脳出血	SAH	合 計
自宅	138	17	8	163
回復期病院	21	7	1	29
療養型病院	5	2	0	7
福祉系施設	13	1	0	14
その他	45	23	9	77
合 計	222	50	18	290

※自宅退院率 76% ～N-その他÷自宅（163÷290=77～77%）

代表幹事　あいさつ　平成 21 年度代表幹事

北見赤十字病院　脳神経外科　副院長　鈴木　望　氏

北見赤十字病院　脳神経外科
副院長　鈴木　望　氏

平成21年度オホーツク脳卒中研究会の代表幹事をさせていただくことになりました　鈴木　望　です。

医療を取り巻く環境が劇的に変化している昨今ですが、この研究会は平成19年から始まり丸2年が経過しました。病院完結型医療から地域完結型医療への変換、行政の計画･提言する4疾病5事業施策(4疾病のなかに脳卒中が含まれている)、さらには地域連携パスの脳卒中患者への導入など｢地域における医療連携体制の構築｣を進めるための取り組みが強く求められ、北見においても早急に体制整備しなければならないという待ったなしの状況下で研究会が発足されました。その後の活動においては、関係各位のご努力により、平成20年度事業総括の中でも報告されていますように｢医療と介護の連携｣などにおいて一定の成果が出てきていると思います。患者さんを受け入れる側の体制(ハード面)は現在の限られた医療資源のなかである程度整備されてきた状況と認識されます。今後の方向性としては、ソフト面の充実-脳卒中になった患者さんひとりひとりが満足できる真に患者本位の医療-の実践が必要と考えられます。

本研究会の発展のために、ひいては脳卒中患者さんのために微力ながら貢献したいと思っているところです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成20年度の活動について振り返る

北星脳神経外科病院　院長　松岡　高博　氏　平成20年度代表幹事

北星脳神経外科病院
院長　松岡　高博　氏

昨年度のオホーツク脳卒中研究会は事業計画通り、1回の市民講座と2回の学術講演会を行うことができました。また昨年6月からは地域連携パスの運用が開始されました。事前に連携情報交換会において十分議論されたことですが、運用が開始されるといろいろ不具合が生じまだ試行錯誤の域にあると思います。

その中で学術講演会において、1回目は西播磨病院の逢坂先生にネットワーク造りの本音ミーティングに参加していただき、これからの方向性を示唆されました。

また2回目では中村記念病院の中川原先生は札幌市の現状を報告され、第一線の急性期病院の連携を強調されました。両先生の講演で、脳卒中患者を急性期から慢性期までトータルでケアするという我々の目指す目標実現に向けて、更なる努力をしなければと再認識しました。

各施設のスタッフ、また幹事の皆様大変有難うございました。これからも地道な努力続けていきましょう。

新幹事のご紹介　医療法人ケイ･アイ　オホーツク海病院　院長　伊藤博史氏

医療法人ケイ・アイ
オホーツク海病院
院　長　伊藤　博史　氏

この4月より、医療法人ケイ･アイオホーツク海病院に赴任しました伊藤博史と申します。

北見を中心とした道東地域は、脳血管疾患の診療連携について先進的な地域であるとお聞きしており、これからオホーツク脳卒中研究会の活動に参加させて頂くことは、大変光栄に存じております。

私は、これまで主として旭川医科大学第二内科にて、糖尿病を中心とした診療を続けて参りました。糖尿病は、高血圧、脂質異常症などと共に、脳卒中などの動脈硬化性疾患の原疾患のひとつであり、微力ではありますが、これまでの自分なりの経験を道東地域の皆様のために何らかのお役に立てるよう努力したいと存じますので、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

オホーツク脳卒中研究会　幹事

北見赤十字病院	鈴木　望	愛し野内科クリニック	岡本　卓
北見赤十字病院	林　浩幸	小 林 病 院	桐山　健司
北星脳神経外科病院	松岡　高博	北見中央病院	森本　典雄
北星脳神経外科病院	本間　巧	道東脳神経外科病院	木村　輝雄
オホーツク海病院	伊藤　博史	道東脳神経外科病院	関　建久
さこうリハビリクリニック	芳澤　昭仁	事務局：山崎　章･高橋ひとみ	

オホーツク脳卒中研究会
事務局：道東脳神経外科病院　医局
北見市美山町68-9
電話(0157)69-0300

ご意見をぜひ事務局までお聞かせ下さい。
次号発行は平成21年11月の予定です。